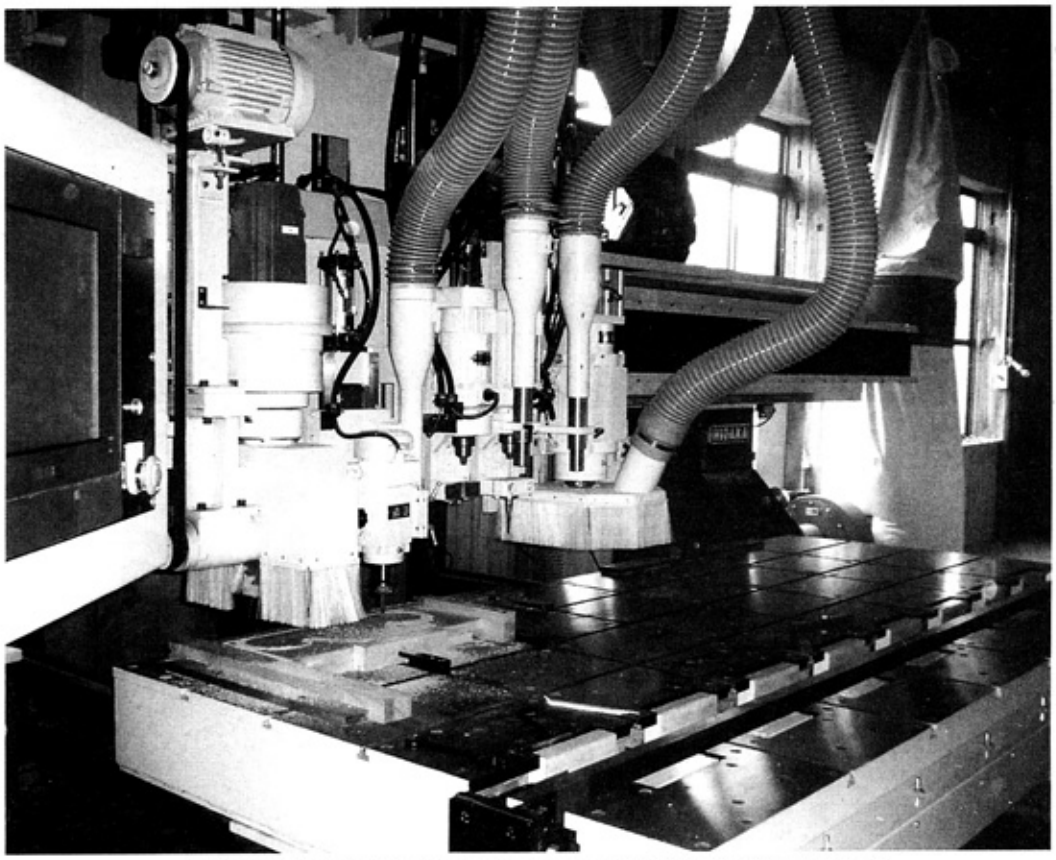
話題あれこれ

職人の高齢化、産業の衰退化に悩む能登・田鶴浜の建具伝統技術を最新NC機械導入により克服へ 産地活性、起死回生の夢に向かって新工場嫁動！

(有)竹田建具製作所



▲(有)竹田建具製作所にはNCマシンをはじめ最新木工機械が導入された

能登・田鶴浜は日本有数の建具産地であった。しかし、ここ二〇年の間に国民のライフスタイルは大きく変わり、和の伝統的な良質な建具を生産していた田鶴浜の建具業界は、国民の住環境の中から和室が一方的に減る傾向の中で大きく影響を受け、今や田鶴浜に残る建具事業所は往時（九〇軒前後あった）の三分の一にまで減少した（日高機械・今村明久部長談）というくらいに低迷している。

「このままでは田鶴浜の建具は消滅してしまう…」。切実な危機感の中にあって、何とか田鶴浜の建具生産技術を継承させたいとの祈りにも似た強い願いをもって、このほど建具製造設備の近代化に取組んだのが(有)竹田建具製作所（石川県七尾市田鶴浜町ぬ部七番地、☎〇七六七―六八―二二八八）の竹田憲昭社長である。

現在、田鶴浜に残る各建具事業所の職人の数は大体二人～三人だという。建具組合の組合長を勤めたこともある有力な竹田建具製作所でも現場は三人の職人しかいない。そうした小さな事業所が集まって産地を形成したのが田鶴浜で、職人達は万能機程度の基本的な木工機械設備だけを使い、手作りの職人技で素晴らしい建具を生産していたのであるが今日、職人の老齢化が進み、後継者も育っていないため、現状を守ることで精一杯、ましてや、積極的な営業展開、製品開発等進まない上、纏まった受注並びに短納期には全く対応できない状況に立ち至っている。

このように、和風伝統建具の急速な需要減が産地崩壊化への第一義ではあるが、加えて職人の高齢化という問題も大きく産地に暗い陰を落としている。優れた職人技の伝承が途絶えてしまう…。戦後、日本の復興と高度経済を伝統技術で支えて来た田鶴浜は、このまま何も成さなければ…まさに終演を

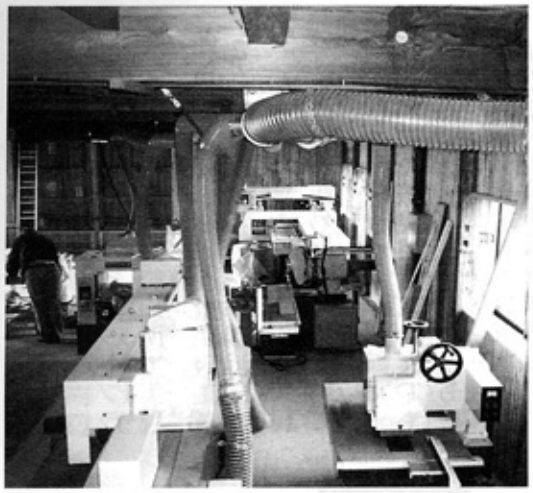
迎える日もそんなに遠くではなかろう…。

竹田社長はこうした状況を払拭すべく、唯一田鶴浜建具の再生を目指し業界関係者の見守る中、新たな展開を開始したのである。

今だからこそ、決断しよう！
地元機械メーカーの協力を得て、最新NCマシンを導入

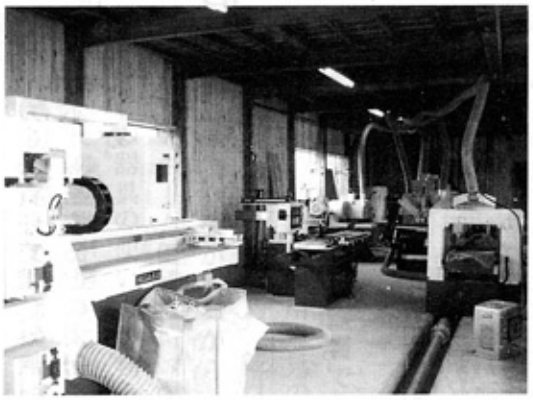
伝統技を体得した能力を最新機械のサポートにより
建具はもとより、木工、家具製造にまで展開！

伝統建具産地、能登・田鶴浜の栄枯盛衰を味わって来た竹田社長はこのほど、地元日高機械（石川県羽咋郡志賀町徳田、日高正明社長、☎〇七六七―三七―一三一一）の絶大な協力を得て、自らの建具技術をベースにした技術の伝承、再起発展を賭けた約一億円の最新設備投資を行なった。



昨年一〇月、竹田建具製作所の新工場へ導入された木工機械を挙げると、①油圧サーボ角のみ盤HC―D5―SV型、②自動一面鉋盤HP―400型、③自動一面鉋盤HP―300型、④リップソーRB―25Ⅲ型（アミテック）、⑤NC上下溝加工機H―07084―1型、⑥NC4軸6ヘッド親ズミ倣い記憶組子溝加工機HCM―450―TP型、⑦NC3軸6ヘッド全自動複合加工機HFK―2400―6J―4NC型、その他四軸モルダーや角ノミ等、付帯設備一式である。

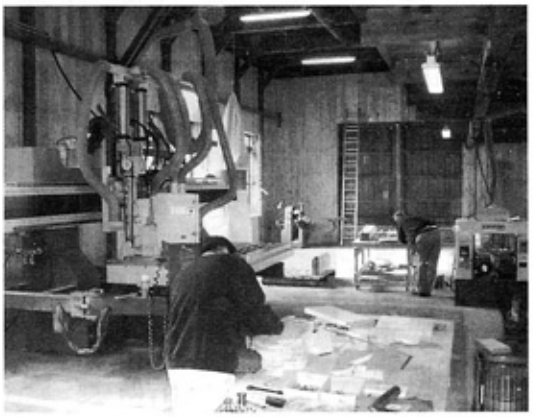
機械設備の中でも、NC対応の上下溝加工機は、長さ二四〇〇㎜の組子桟を複数本同時に上下からの溝加工とホゾ取りを行なう機械。一度に組子桟の加工を同時に行なって、後は加工された桟を人間が組み立てるだけという省力・高能率機械である。



また、NC複合加工機は、ルーター軸が二セット、角のみ軸二セット、ケ引軸、鋸軸を装備。基本的には建具生産用のNC対応機械であるが、今後、建具だけではなく、作り付け家具、三尺×八尺ドアの飾面加工とか、一般の木工加工の、受注できるものは建具にこだわらずに加工生産して行く考えだという。

実は、日高機械の発展も地元の建具産業の隆盛と共にあったという。それだけに、今日の建具産業の衰退を目にしている日高正明社長は、「今、田鶴浜の建具業界に恩返しして立て直さなければ全滅してしまう」と危惧、復興の為の全面支援を日高明広専務をはじめ、今村明久部長以下社員に強く指示しているとか。

それを受けて日高機械の日高明広専務は、「今まで田鶴浜で対応出来ずに他所の外注に出していた



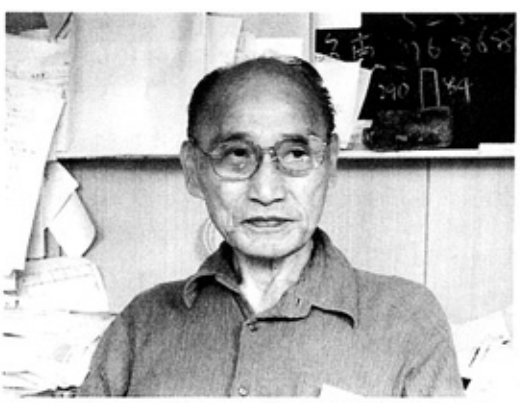
▲熟練の建具職人だからこそNC機械が活かせられるのだ

仕事を田鶴浜で受注し、結果として産地田鶴浜全体に仕事が回って来るような一つのパイロットプラントを今回竹田建具製作所で実現して行きたい。我々としても、今回の竹田社長の投資を田鶴浜だけの一つのエポックメーキングでは無く、全国の建具屋さんにとっても参考モデルになるよう、これを何といっても成功させていくつもりで臨んでいる」と語る。頼もしい限りである。

なるほど、日高機械はグループ会社の田辺鉄工所はもちろんのこと、機械の設計製造、NCプログラミングまでこなしてしまう優秀な機械メーカーである。ことに最近では、NCプレカット機械それも社寺対応型の大型NC機械には定評があり、全国から付加価値の高い加工機械を通じた独自な加工ネットワークを維持している。

「ここ数年、三人〜四人規模の建具屋さんで一億円を超す投資をする方はいない。しかし、導入した機械は建具というより社寺彫刻の部材加工もでき、一方、ボアズ工場（特殊な木造住宅生産）も準備されており、これから様々な加工仕事が出て来る。我々は縁の下の力持ち、基本的には営業的な展開でも応援する」と日高専務は語り、新工場の立ち上げから指導までメーカーの責任で惜しみ無い協力とサポートをするとの姿勢を打出している。

対談 田鶴浜から発信します！



▲産地活性化の為に思い切って設備投資をしたと語る㈲竹田建具製作所の竹田憲昭社長

日高機械・日高明広専務——加工仕事がある程度のボリュームになると、これまで田鶴浜でこなせないとい現状もあった。結局、そこそこの生産体制を持っている地域の加工事業所に仕事が流れてしまっていた。

本誌——こちらの地元には和倉温泉街があって、旅館等からの建具の注文は結構あるのでは？

㈲竹田建具製作所・竹田憲昭社長——最近は需要が落ちている。加賀屋さんくらいだ、積極的に動いているのは。温泉客が減れば、建具の注文が無くなる。空いた部屋がたくさんあるから、壊れて取り換えなくちゃいけない建具も後回しだ…な。

日高機械・今村明久部長——酷いものですよ。数年前、和倉でも五本の指に入るホテルが、上層の階に行くと障子が破れたままであったりして…ね。

本誌——今や、有名観光地でも客が集まらない。

日高専務——そう言う旅館向けに安く良質な建具を提供できる方法を考えなくては。壁紙を一新しなくても開口部の建具は一新できる。デザインで価値のあるもの、必要とされる建具製品は何なのか、を。

▲日高機械の日高明広専務

竹田社長——客が金さえ出してくれれば何でも出来るが、そんな調子の良い話は無い。やはりお客の必要性に応じて供給して行くと言うことなので、買ってもらう人に価格・質面で納得してもらわないと。

本誌——こちらの販売ルートは？

竹田社長——ショールームもあるが、工務店の下請けが多くなっている。

日高専務——建具屋は下請けの下請けの下請け。ハウスメーカーの下に入っている工務店からの注

文だから、値段に変動の要素は全くない。それと現在の住宅は昔と違っている。例えば消防法、ホルムアルデヒドがどうとかのシックハウス問題、安全性、耐火性等、要するに現代に必要とされる建具そのものが変わっている。中堅のハウスメーカー用に作り付けの家具まで対応しようと思ったら、既存の設備では対応しきれない。

本誌――今の家は襖、障子が少なくなった。

竹田社長――少なくなりましたね…。

日高専務――竹田社長が憂いているのは、建具全体の技術水準も仕事量も職人も減っている、田鶴浜全体をみても厳しい局面というか、これ以上衰退したら田鶴浜というのは何の町だったのか…という状況になってしまうことだ。

今村部長――実は、住宅の工務店も一箇所で住宅部品を揃えたい。その意味で建具業界も建具だけでなく、作り付け家具とかその周辺の関連加工品を製作して供給できるとしたら…産地の懐が大きくなる。

▲日高機械の今村明久技術部長

日高専務――一輪車とトラックでは運搬に掛かる日数が違い、当然単価も違う。竹田建具製作所に入れた今度の設備で建具も効率生産できるし、家具や木工品に付いても充分な余力がある。窓一つでも綺麗に丸を抜くとか、ミッキーマウスの形に抜くとか、竹田さんでは収めた実績もあるから、一般住宅プラスαの幼稚園、保育所、公民館等からの新たな需要に対し、全て自分の設備でやれる。

竹田社長――私達の地域を眺めると、まず物を作る人たちが高齢化してしまい、腕で稼ごうと思っても最早職人がいない。年寄りで相手に認めて貰えない。従って、新しい設備、スタッフで物造りをしてユーザーの期待に応えるものが造られるという状況を作らなきゃ遺憾。そして産地の活性化に繋がって行かんだろうか…な。このままでは段々じり貧になって行くと思う。そういうことを踏まえて日高機械の協力を得て何とかやって行かなくてはならないと思っている。

私自身も年いってるから心配で焦ってもいる。

日高専務――第一線の機械を使えば、仕事もできる。技能も見識も有る方にとって、機械は増幅器なので、経験と見識のある人ならばNC機械を道具として非常に上手く使いこなせるはず。

竹田社長――使いながら自分のものにしていく。

日高専務――野球の監督でも、新しい選手の筋肉強化用道具の使い方が判らない。しかし、彼は一流プレーヤー経験があるから、監督になってチーム優勝に持っていける。その器具の使い方が判らなくても、その器具が選手にとってどういう効果をもたらすかは予見できる。建具においても新しい道具(設備)が実際に凄い能力を持っていることを見い出したら、その要のところを竹田社長が理解してさえいれば良いと思う。

我々機械メーカーは、如何に監督者をサポートして選手を使いこなせるかである。

☆　☆　☆

さて、伝統建具産地だった故に、仕事待の姿勢で対応していた田鶴浜。本当の意味での営業体制をとって来たのかどうか、再考せねばならない。今回の竹田建具製作所でのプロジェクトは、こなし切れない程の仕事を集約させるのが大きな目標でもある。日高機械としても、「田鶴浜に仕事を集める応援ができれば…即ち我々にとって新たな機械開発と繋がって行く。竹田社長は三期前の会長であり、田鶴浜に竹田建具製作所という良い工場があるので、安心して堂々と紹介できる」と日高専務。

さて、起死回生のプランがスタートした。やっと、中堅のビルダーや設計士にも貢献できる体制の準備が整った。これから田鶴浜から大いに発信するという。夢の成功を祈りたい…。